

地域との共生に取り組む鉄道事業者を視察し、意見交換を展開！

～鉄道特性活性化プロジェクト第4回会合において現場視察～

2月28日、JR連合が主催する「鉄道特性活性化プロジェクト（PT）」第4回会合として、PTメンバーで「えちぜん鉄道」および「福井鉄道」の両事業者を訪問し、意見交換を展開した。今回の視察には同PTでアドバイザーを務める専修大学太田教授をはじめ、JR連合及び各単組PTメンバーが参加した。

日本は世界でも類例のない超高齢化社会・人口減少時代に突入し、鉄道についても沿線人口の減少により、ここ10年間で約600kmに及ぶ鉄道路線が廃線となっている。私たちJR連合は、鉄道で働く労働者が集う労働組合としてそうした厳しい環境下においても未来に亘り魅力ある鉄道産業を創り出す責務があり、鉄道特性活性化PTでは、沿線人口の減少の中でも地域住民とともに鉄道活性化に取り組む事業者から様々な知見を得るべく、現地視察及び意見交換を行うこととなった。

今回訪問させて頂いたえちぜん鉄道の前身は京福電鉄であったが、平成12年及び13年と立て続けに正面衝突事故を引き起こし、約2年5ヶ月の間鉄道運行がストップし、バス代行輸送が行われた。しかし、道路の渋滞や定時運行が困難なバス輸送に対して住民から不満の声が出され、「鉄道の復活」を望む住民運動が活発化した。その結果として福井県及び沿線自治体がタイアップして第三セクターによる「えちぜん鉄道」が発足、鉄道の運転が再開された。そうした経緯で発足しているが故、えちぜん鉄道は「地域、社会との信頼」「地域共生型サービス企業」を企業方針に掲げ、地域とともに鉄道の再生に取り組んでいる。実際にえちぜん鉄道に乗車したところ、アテンダントが懇切丁寧に一人一人のお客様に対してやりとりを行っており、また、サポーター制度に協賛した沿線の飲食店などの一覧が社内広告に掲出され、サポーターと一体となった経営が強く印象づけられていた。意見交換の際に豊北社長をはじめ経営幹部から、「会社発足の経緯から沿線の皆様とともに存在する企業を目指している」「我々は鉄道を営んではいるが、鉄道



事業ではなくサービス企業である。お客様のニーズを的確に把握し、そのニーズに対応することに心がけている」といったご意見を拝聴することができた。

続いて福井鉄道を訪ねた。福井鉄道はほぼJR西日本北陸本線と並行しており、乗車人員は昭和40年をピークとして年々減少していた。福井市内に敷設されている軌道敷をはじめとして鉄道設備の老朽化が著しく、継続した安定経営が危ぶまれていた。そうした最中、前述の京福電鉄の運行停止もあり、沿線住民から福井鉄道を残そうという声が目立ち、沿線住民の力が結集し、福井県ならびに沿線3市が連携して再生に向けたプランを検討した。その結果、国土交通省が制度設計した「鉄道事業再構築実施計画」に則った再生を目指すこととなり、平成21年2月、国土交通省から当該計画第1号として認定を受けた。具体的には、福井鉄道の持つ鉄道用地を沿線3市に売却し、沿線3市は福井鉄道に無償貸付という形で線路使用をさせるという、新たな上下分離方式を採用した。また、国や福井県などから安全対策強化対策に視する設備投資支援のみならず、線路や電路維持に対する修繕費についても公的援助を得ることとなった。一方で、沿線住民との連携強化を図るべく、サポート団体との様々な取り組みを行っている。サポート団体は駅付近にパークアンドライドを設置したり、沿線ウォーキングを企画するなど、福井鉄道の利用者増を図る様々な取り組みを行っている。村田社長からはそうした沿線自治体及びサポート団体との日夜に亘る支援体制がなければ再建は難しかったとの所見が述べられ、また、当方との意見交換に参加頂いたサポート団体の皆様からも、「我々の手で福井鉄道を維持していくんだ」という意識を強く持っている」とのご意見を伺うことができた。



今回の視察では、沿線自治体がしっかりと財政面を含めてバックアップし、かつ、沿線住民の皆様が鉄道運営に共に参画しているという環境の中で地域共生を実現している両事業者の状況を知ることができた。JRにとっても極めて参考になる事例であることから、今回得られた様々な知見等を今後のプロジェクト活動に活かしていく。